特集

災害時における取材・送信・受信・CATVの課題

9月3日、高知県東部に上陸した台風12号は四国地方、中国地方を縦断して日本海へ抜けた。紀伊半島では8月30日夕方からの総降水量が1,800ミリという“爆”雨となった地域も出た。奈良や和歌山の一帯は5月と7月に台風による大雨があり、8月に入っても間断なく大雨に見舞われた。

土砂崩れでできたせき止め湖(土砂ダム)が決壊の危機に直面した他、孤立集落の発生など甚大な被害をもたらし、死者70名以上という尊い人命を奪った。ここ数年、毎年襲ってくる水害は地域の疲弊をもたらしている。

とりわけ、報道するメディアの取材力が厳しい自然の猛威にどう立ち向かうのかが問われている。

一方、地上デジタル放送となったテレビ受信はどうか。地デジ受信対応で効果を上げたCATVへの巻き取り加入であったが、ケーブル断線のなかで情報空白が生じていた。豪雨被災によってどういった問題が噴き出したのか。取材と放送送信、受信、CATVの課題をレポートする。

(企画担当:吉井 勇・本誌編集長、渡辺 元・本誌編集部)

特集構成

■ **取材の取り組み**

1 NHK大阪放送局
「衛星伝送装置が最強のパートナー」

2 毎日放送
「小型で持ち運べる衛星伝送を活用」

■ **送信確保の取り組み**

NHKアイテック 関西支社
「送信中継局の自家発電にヘリ輸送・給油」

■ **受信の取り組み**

・近畿総通局放送部長に聞く
「限界集落CATV復旧と災害情報提供の備え」

・NHK共聴受信
「ケーブル断線などで約800世帯が停波」

・被災2局から見えた
「CATV災害対策のポイント」

1 三重県 ZTV

2 奈良県・こまどりケーブル

■ **CATV被災と経営問題**

「ひとたび被災すれば億レベルの負債が襲う」

■ **ギャップフィラー5社特別座談会**

「災害対策力のあるギャップフィラー」